

## 「寮母は宝」されど

知人の某ホーム非難のお便り。

「特養ホームにお訪ねする毎に表情はだんだん暗く体はこわばっていくようです。手も硬直し彼女が『食べれん』と訴えると、『甘えるな』と一蹴され、昨夜は食べなかつたと、持参のお菓子を食<sup>じまほ</sup>るように食べる姿に私は涙が止まりません。私たちはニコやかな寮母の愛想よさ、園長の誇らしげな説明はもはや偽善としか思えません。夕食の一口もあげない福祉とは何でしょうか……」

某園どころではない。わが園、私自身に突きつけられた非難として受けねばならぬい。

深夜は二人交代仮眠の一人勤務。この数時間、寮母によっては恐ろしい場所に変じかねない。要注意患者が高熱。A寮母はすぐに水枕などして看護婦に連絡して事なきを得た。しかし、前半勤務のB寮母は一応検温（高熱）、しかし、全く処置なしであった。ことは重大である。施設長はB寮母に退職につながりかねない嚴重注意。

施設の存在理由は「利用者本位」が絶対。えてして、施設では職員間の和と称して「職員本位」に逆転する恐れがある。その時、職員は加害者になる。だから若い人への「優しさ」は寮母間の「厳しさ」、相互抑制に裏付けられねばならない。

寮母主任村上昌子の手記―「十七年前の私は失意にあえいでいた。そこからの立ち直りは厳しい任運荘との出会いである。厳しさと共にひとの優しさを教えられた。優しい心の介護で少しずつだが、お返しをしよう。六十年間生きて来た中で、この十七年は仕事を通してのものの方の大切さを教わった。私の一生の宝である」。

(一九九六年六月十九日)